

言語事実と論理

—「論理的構文論」による読解—

川 崎 誠

一 テキストに論理を読む

(1)

ヘーゲルが次のように喝破したのはおおよそ 200 年前である。

批判哲学は形而上学を論理学にした。(『大論理学』1 p.52 「序論」)

またウィトゲンシュタインが次を書き遺してから 100 年近くが経っている。

3-33 論理的構文論においては、記号の意味は何ら役割を果たしてはならない；論理的構文論は記号の意味が問題になることなく立てられねばならず、諸表現の記述だけを前提しうる。(『論理哲学論考』— 以下『論考』と略—)

「論理的構文論」はウィトゲンシュタイン哲学の方法である。そして方法が哲学そのものであるからには⁽¹⁾、ウィトゲンシュタインが遺した諸々の著作の主眼はその論理的であることにある。すると「論理的なもの (das Logische)」を探究したウィトゲンシュタインはヘーゲルの正統な後継者である。

さて「論理的構文論においては、記号の意味は何ら役割を果たしてはならない (In der logischen Syntax darf nie die Bedeutung eines Zeichens eine

Rolle spielen.)」。そうであれば、たとえその成り立ちの互いに無関係である複数の叙述——例えば経済学批判の叙述と言語学批判のそれ——にあっても、前提されるそれぞれの「表現の記述 (die Beschreibung des Ausdrucks)」がその「論理的なもの」において一致する、そうしたことがありえよう。例えばマルクス『資本論』とソシュール「第3回講義」とがそれである。

<資本論> [労働力という] 一般的人間的な本性を、それが特定の労働部門における技能と熟練とに到達し、発達した独特な労働力になるように変化させるためには、特定の養成または教育が必要であり、それにはまたそれで、大なり小なりの額の商品等価物が費用としてかかる。労働力の性格がより複雑なものであるかないかの程度に応じて、その養成費も異なってくる。したがって、この修業費は普通の労働力についてはほんのわずかでしかないとはいえ、労働力の生産のために支出される価値の枠のなかにはいっていく。(第4章第3節 13パラグラフ)

<第3回講義> 空間におけるこの多様性は、その現象を認めるためには時間のうちに投影しなければならない。(1910年11月29日)

まず後者「第3回講義」に謂う「現象」すなわち「空間におけるこの多様性 (cette diversité qui est dans l'espace)」だが、その具体例を『一般言語学講義』——以下『講義』と略——から挙げてみる。

(参考) ドイツ語の子音推移の例。いま音韻 t がゲルマン語領土の一点において ts となったとすると、この新しい音は発祥地のめぐりに放射しようとし、その空間的伝播のさいに、それはもとの t なり、他の地点においてそれから出生しえた他の音なりと、抗争することになる。(p.291)

「発祥地」における $t \rightarrow ts$ の変容は「音韻変化 (le changement phonétique)」だが、その ts は「発祥地のめぐりに放射しようとし、その空間的伝播のさいに、それはもとの t なり、他の地点においてそれから出生しえた他の音なり

と、抗争する」、すなわち「空間における多様性」である。そして *t* や *ts* あるいは「他の音」をもつ諸方言は「特有語 (idiome)」である。特有語とは「一社会固有の特徴 (les traits propres d'une communauté) を反映するものとしての言語」(『講義』p.269) のことであり、そのなかでも「隔たる度合のわずかな特有語」(同 p.271) が「方言」と呼ばれるからである。

そこで「第3回講義」の説く「現象」を、『資本論』に準えて次のように言い換えることができよう：「一般的な *t* が、特定の言語における (*ts* 音なり他の音なりを発する) 技能と熟練とに到達し、発達した独特な言語能力になるように変化した」、そうした「空間における多様性」。

音韻変化に先立ってゲルマン語で *ts* 音の発せられることはない。だから *ts* 音を発することは「発達した独特な言語能力」である。同じことは *ts* 音と抗争する *t* 音や「他の音」についても言えるから、「発達した独特な言語能力」は「空間的に多様」であり、「発達した独特な労働力」に対比されるのである。後者のそれぞれは「特定の労働部門 (ein bestimmter Arbeitszweig) における技能と熟練とに到達し」ており、つまり「発達した独特な労働力」もまた「空間的に多様」だからである — ‘Zweig’は「分枝・枝に分かれたもの」の謂であり、「特有語」に通う。なお‘trait propre’と‘bestimmt’の対応 —。さらに「一般的人間的な本性を発達した独特な労働力になるように変化させるためには、特定の養成または教育が必要である」のと同様に、*t* が *ts* すなわち「独特の言語能力になるように変化させるためには、特定の養成または教育が必要であり」、したがって「時間」を要する。実際、「*t* から *z* (発音は *ts*) への変化は、600 年ころアルプスを発して、同時に北と、南すなわちロンバルディアとに拡がったに相違ない。*t* はまだ 8 世紀のあるチューリンゲン文書のうちに読まれる」(『講義』p.290) のであった。ソシュールが「その現象を認めるためには時間のうちに投影しなければならない」と説くゆえんだが、「修業費が、労働力の生産のために支出される価値の枠のなかにはいっていく (gehn ein in den Umkreis der zu ihrer Produktion verausgabten Werthe)」のと同じく、*ts* 音を習得するための費用も「*ts* 音の生産のために支出される価値の枠のなかにはいっていく」 — ここでは *ts* 音を一方の音とみなし、共通語の教育と別に方言教育の時間と費用の必要であることが想

起される —。

このように『資本論』と「第3回講義」という二つのテキストは「論理的構文論」の立場からは同じ「論理的なもの」を叙している。そして両者に共通する論理は、論理学書において次のように説かれる。『大論理学』の一節（本質論 第3編現実性 第1章「絶対的なもの」 C 絶対的なもの様態）。

<大> [様態は] 絶対的なものそのものを示す運動であるところの透明な外面態 [である] ; (『大論理学』 2 p.227)

「特定の労働部門における技能と熟練とに到達し、発達した独特な労働力」や「空間における多様性」は、「絶対的なものそのものを示す運動であるところの透明な外面態 (die durchsichtige Äußerlichkeit)」すなわち「様態 (Modus)」である。「様態」とは「形式と内容諸規定の総体性を欠いた多様態」(同 p.226) だからである。では様態の示す「絶対的なもの」は何かと言えば、『資本論』においては「一般的人間的な本性」としての「労働力」であり、「第3回講義」においては $t \rightarrow ts$ の変化を通して変わらない当該音韻である — 英 : ten · 独 : zehn ↔ 英 : lens · 独 : Linse、英 : tide · 独 : Zeit ↔ 英 : ripe · 独 : reif 等 —。

(2)

このように、論理学書で説かれる論理は、事実を叙する経済学の叙述や言語学の叙述において具体化されることがある。前者で抽象的に展開される論理が、後者において具体的なイメージのもとに理解されるのである⁽²⁾。ではウィトゲンシュタインの場合はどうか。彼の著作もまた、「論理的なもの」の把握にその主眼があった。このことは上に説いた。そうであれば『大論理学』の場合と同様、何らかの事実に関する他分野の学の叙述がウィトゲンシュタインの遺した論理の具体例として読まれうる、そうした叙述はないものか。

それがあるのである。例えば『哲学探究』 — 以下『探究』と略 — の次の叙述。

76 誰かがはっきりした境界線を引いたとしても、私はそれを、自分も常に引こうと思っていた境界線、あるいは心の中ではすでに引いてしまっていた境界線として認知することができないだろう。というのは、私はいかなる境界線も引こうと思っていなかったのだから。このとき、人は次のように言うことができる：彼の想念は私の想念と同じではないが、親和的である。この親和性は、境界のはっきりしない色の斑点からなる一枚の絵と、似た形と配置だが、境界のはっきりした色の斑点から成るもう一枚の絵の、二枚の絵の親和性である。このとき、この親和性はその差異性と同様、否定することができない。

ウィトゲンシュタインの説くところは、時に「何を言っているのかよく分からない」と言われる。この76節についても著者の真意の奈辺にあるか、了解は容易でない。「誰かが引いた境界線を、自分も常に引こうと思っていた境界線として認知することができない」、そもそも冒頭文にしてからが、これは何について言っているのか。

だがこの『探究』の一文を、『講義』の次の一文と関連づけて読むと、読解はがぜん容易になる。『講義』第III編通時言語学の第8章「通時論上の単位同一性および実在」、2パラグラフ第3文である。

<講義> インドヨーロッパ語は前置詞を知らなかった⁽³⁾；

この叙述を補うものとして、さらに次を参照する。

1月のある夜、テレビでニュースを見ていると、スマートフォンについて街頭インタビューをしていた。すると、30代らしき男の人が、次のように答えた。

「スマートフォンは、レストランとか簡単に調べて行けられる」

どうです、この日本語。「行けられる」ですよ、「行けられる」。

また、昨年夏の夏のこと。大きな試合に出場が決まったプロスポーツ選手が、テレビ番組で次のように話していた。

「自分が出られるとは思わなかった」

どうです、この日本語。「出られる」ですよ、「出られる」。

これらは「ら抜き」の言葉を認めた弊害である。彼らは「～することができる」という「可能」のニュアンスを伝えたかったのだと思う。「ら抜き」の場合、「出れる」で「可能」は示せし、「行く」は「ら抜き」とは関係なく「行ける」で示せる。しかし、日常的に「ら抜き」で話している人にとって、そこに「can」のニュアンスはこもっていない気がしたのではない。そして咄嗟に出たのが「行けられる」であり「出られる」だった。

だが、彼らを一方的に責めるわけにはいかない。責められるべきは「ら抜き」を許したことだ。常套思考じょうどうの「言葉は生きもの。変化は当然」を猛省する必要がある。

先ごろある女性国会議員のインタビューをテレビで見たが、みごとに「ら抜き」で語る。もしかしたら「週末は地元に戻られた」とでも言うかと思っただが、さすがにそれはなかった。興味深かったのは、「ら抜き」で語る彼女の言葉に、画面表示ではすべて「ら」が加えられていたことだ。テレビ局の良心を見た気がした。

(内館牧子「この途方もない言葉」『日本経済新聞』2011年2月19日)

脚本家にとって、「行けられる」や「出られる」は「途方もない言葉」である。「途方もない (maßlos)」すなわち「むちゃくちゃ」だから、「行けられる」や「出られる」は実は日本語ではない——「日本語は『行けられる』や『出られる』を知らなかった」——。「30代男が『行けられる』を使っても、脚本家はそれを、自分もつねに使おうと思っていた言葉、あるいは心の中ではすでに使っている言葉として認知することができない」のである。しかしそれにもかかわらず、脚本家は30代男の発話「スマートフォンは、レストランとか簡単に調べて行けられる」を理解した、「彼は『～することができる』という『可能』のニュアンスを伝えたかったのだと思う」、というように。そうであれば「30代男の想念は脚本家の想念と同じではないが、親和的 (verwandt) である」。この親和性はウィトゲンシュタインの指摘する二枚の絵の親和性と別のものではなからう⁽⁴⁾。

このように、論理的構文論に基づく読解において、『講義』に紹介される言語事実がウィトゲンシュタインの著作の理解を助ける、そうした例は他にも多数見出される。

二 『哲学的文法』読解

以下では『哲学的文法』第2部——以下PGと略——冒頭部を採り上げ、その論理が『講義』第III編「通時言語学」第3章「音韻進化の文法的帰結」と通底することを示してみる。論理とは勝義連文的推論である。このことに鑑みて、次には両テキストの範囲をやや広めにとり、両者の論理的な対応を探っていく。

PGについて述べておこう。第2部は「論理学と数学について」と題され、全43節が「1 論理的推論」から「7 数学における無限 外延的理解」に七大別される。それぞれに含まれる節の数は不定である。目次に当たる「内容 (Inhalt)」に書かれた各節ごとの叙述は、本文の各節冒頭にも再掲されて節標題の役割を果たしている。本稿ではゴチック体で示す。

節内部の編成については、パラグラフ——改行ごとの区切り——の数はかなり多い。ただしパラグラフと次のパラグラフとの間は、たんなる改行であったり一行空いていたりとは一定していない。またパラグラフによってそこに含まれる文の数は異なる。本稿では、[△]でパラグラフ番号を、[△-○]でパラグラフ内の文の番号を示す。

「1 論理的推論」は四つの節に分かれ、1節の「内容」は次である。

1 p が q から帰結することをわれわれが知るの、それらの命題を理解するからなのか。帰結する運動は意義から出てくるのか。

「p が q から帰結する (p aus q folgt)」とあるが、『講義』の第3章は標題が「音韻進化の文法的帰結 (Conséquences grammaticales de l'évolution phonétique)」であり、二つのテキストがともに帰結関係の解明をめざしている

ことが分かる。「帰結」というのは人が考えるほどには容易でないのである⁽⁵⁾。

(1)

PG の 1 節 1 パラグラフは一文だけから成る。

[1] p.q.=p は「q が p から帰結する」をいみする。

そしてこれは、『講義』の第 3 章第 3 節「音韻的双生語なるものはない」冒頭に即して読まれる。

<講義> 第 1 節「文法的連結の中断」および第 2 節「語の合成の抹殺」で考察した二つの場合では、進化が、元來文法的につながれた二つの辞項を徹底的に引き離している。この現象は解釈上重大な誤りの機縁とならないとも限らない。(p.218)

第 3 章の標題が「音韻進化の文法的帰結」であるように、ここでも「進化」とあるのは「音韻進化」のことである。言語事実は「通時論的事実 (un fait diachronique)」と「共時論的事実 (un fait synchronique)」とがあるが、「音韻進化」は前者に属し、後者は「文法」によって代表される。だから「[前二節で考察した] 二つの場合」・すなわち「音韻進化が、元來文法的につながれた二つの辞項を徹底的に引き離している」という「現象」は、これを「q が p から帰結する」にならって言えば、「共時論的事実が通時論的事実から帰結する」のである。しかしソシュールは「この現象は解釈上重大な誤りの機縁とならないとも限らない」と説き、それと同じ疑いが PG 一節「内容」の「p が q から帰結することをわれわれが知るの、それらの命題を理解するからなのか」で表明される。われわれは共時論的事実・通時論的事実の何であるかを、果たして理解しているだろうか、というわけである。

そして PG は次の [表 1] を掲げる。

p	q	$p \vee q$	q	q = $(p \vee q) \cdot q$	$(p \vee q)$ = $(p \vee q) \vee q$
真	真	真	真	真	真
真	偽	真	偽	偽	真
偽	真	真	真	真	真
偽	偽	偽	偽	偽	偽

この表の理解もまた、『講義』で引き続き説かれる叙述を参照することで容易になる。

<講義> 後期ラテン語の *barō : barōnem* の相対的同一と、古代フランス語 *ber : baron* の不同とを認証したとき、人は一にして同じ原始的統一 (*bar*) が別々の方向に発達して、二つの語形を生んだのだ、と言いたくなりはしないか？ いや、なぜなら同一の要素は同じ時、同じ所において、あい異なる二つの変容作用に従うことはありえないからである；それは音韻変化の定義そのものと矛盾しよう。音の進化は、単独では、一個ではなしに二個の形態を作り出す力はないのである。(p.218)

「p が q から帰結する」、このとき q は p であるのか、p でないのか。「q が p である」(p は q の他者でない) なら両者は同一であり、このとき「p が q から帰結する」ことはない — ‘folgen : hinter etw. hergehen’ —。「q が p でない」(p は q の他者である) なら両者は互いに無関係であり、このとき p が q から導かれるにしてもそれは偶然である。「p が q から [必然的に] 帰結する」ためには「q は p であり、かつ p でない」のでなければならず、したがって q はその限界 (Grenze) においてある。「限界は、或るものと他者によって存在しまた存在しない、そうした媒介である」(WdL I S.136) からである。そこで「q から帰結する p」は表 1 において「 $p \vee q$ 」である。そ

の「pVq」と「q」との関係が〔表1〕三列目以降である。

さて「pがqから帰結する」からには、qは真である・すなわち存立する。したがって表1の二行目と四行目は考察の対象から除かれる。

残る一行目・三行目のまず後者から。『講義』に謂う「*barō* : *barōnem* の相対的同一 (l'identité relative)」とは両者が「同一語の二つの屈折形の間にある正常の関係 (le rapport normal)」(p.216)にあることを言い、「*ber* : *baron* の不同 (la disparité)」とはその正常の関係の「中断 (le rompre)」(同)を言う。そこで(pVq).q=q — 「(pVq)がqから帰結する」 — において p : *ber*、q : *bar*-と置けば、「*ber*または*bar*-」が*bar*-から帰結する、と「言いたくなる」。そのいみするところは、「一にして同じ原始的統一 (*bar*-) が別々の方向に発達して、二つの語形 [*ber*・*bar-on*] を生んだ」・すなわち『講義』第三章の標題に反して「音韻的雙生語なるものがある」ということである。「雙生語」は「形と意味の異なる同語源の一對の語」である。そしてその「語源」すなわち「一にして同じ原始的統一 (une seule et même unité primitive)」が音韻変化を経て一對の語を生じるという考えから「音韻的雙生語 (doublet phonétique)」が言われる。

しかしソシュールは「人の言いたくなる」ことを斥け、「いや」と断ずる。「同一の要素が同じ時、同じ所において、あい異なる二つの変容作用 (q→p と q→q) に従うことはありえないから」だが、このことは三行目において「p : 偽」の示すところである。このように、「音の進化は、単独では、一個ではなしに二個の形態を作り出す力はない」。

三行目の最終列(pVq)Vq=(pVq)は一行目に包摂される。その一行目では「p : 真」「q : 真」であり、*ber*と*bar*-とは存立する。するとここでは、(pVq).q=q すなわち「*ber*または*bar*-」が*bar*-から帰結するかに見えるだろう。これはどうしたことか。その次第を説き、あわせて最終列(pVq)Vq=(pVq)を考察するのが2パラグラフである。

(2)

以下では対応関係にある PG・『講義』の叙述を最初に掲げ、次いでその読

解を示す。

[2-①] $(\exists x).fx \vee fa. = (\exists x).fx, (\exists x).fx.f.a. = fa.$

<講義> われわれの説に異をとなえるとすれば、それは次のようなものであるか；それらの反論が実例をもって始められたと仮定してみる：人は言うであろう：*collocāre* は *coucher* と *colloquer* とを生じた、と。いや、*coucher* のみである；*colloquer* はラテン語からの学者的借用語にすぎない。

しかし *cathedra* は *chaire* と *chaise* とを生じはしなかったか、二つとも正真正銘のフランス語なのに？ 実は、*chaise* は方言形なのである。パリ弁は母音間の *r* を *z* に変えた；それは、例えば *père*、*mère* を *pèse*、*mèse* と言った；フランス文学語はこうした地方的発音を二例しか残していない：*chaise* と *bésicles* (*béryl* からきた *béricles* の双生語)。(p.218)

いま問題は、「p：真」「q：真」でありながら、なお $(p \vee q).q = q$ — 「p または q」が q から帰結する — であることである。2 パラグラフはその p を $(\exists x).fx$ 、q を fa と置く。これは q を定在 (Dasein)・「自己自身への否定的関係 (die negative Beziehung auf sich selbst)」(『大論理学』1 p.129) と把握してのことであり、p は「その否定態 [q] の契機を自分の限界として自身から区別する」ところの「規定態」(同) である — 「規定態は、即自存在的な規定態としての規定と、向他存在的な規定態としての性状とに区別される」(同)。すなわち $(\exists x).fx$ の二面性 — 『講義』は q すなわち fa を「借用語 (un emprunt)」とする。

『講義』の前半は $(\exists x).fx \vee fa. = (\exists x).fx$ の具体例になる。ここでは $(\exists x).fx$ の真が fa の影響を受けない。もし「*collocāre* は *coucher* と *colloquer* とを生じた」と仮定すれば、これは「同一の要素 [*collocāre*] が同じ時、同じ所において、あい異なる二つの変容作用に従うことがありうる」ということと変わらない。ゆえに『講義』は「いや、*coucher* のみである」と続ける。「*colloquer* [fa] はラテン語からの学者的借用語にすぎず」、その如何様にかかわりなく

coucher は真・存立するからである。つまり $(\exists x).fx \vee fa = (\exists x).fx$ である。このことは、「学者的専門用語」をいみする「ジャーゴン (jargon)」がそれ自体主に学者仲間で使用され一般的な日本語としては定着していないことを想起して、理解は容易であろう。

『講義』後半は $(\exists x).fx.f.a = fa$ ・すなわち「 $(\exists x).fx$ が *fa* から帰結する」に対応する。「*cathedra* は *chaire* と *chaise* とを生じはしなかったか、二つとも正真正銘のフランス語なのに？」という問いも、音韻的双生語は存在すると疑っている。けれども「実は、*chaise* は方言形 — 一種の借用語 — なのであり」、これにより人は「パリ弁が母音間の *r* を *z* に変えた」ことを知る。ただし「フランス文学語 (le français littéraire) はこうした地方的発音を二例しか残しておらず、それらは例外である⁽⁶⁾。他に双生語は存せず、むしろ例外の存在 (*fa*: 方言形からの借用語) が規定態「(フランス文学語である) パリ弁」を人に教える。すなわち「 $(\exists x).fx$ が *fa* から帰結する」。これを論理的に言えば、「フランス文学語」が「即自存在」(本来的なパリ弁) であるのに対して、「方言形」は「性状 (Beschaffenheit)」である — 「あれこれの性状をもつとされる場合に、或るものは自己のうちに存するものとしてではなく、外的な影響と関係のうちに在るものとして (als in äußerem Einfluß und Verhältnis) 把握されている」(『大論理学』1 p.136) —。

[2-②] 私はそれをどのように知るのか (それは、上のことを私はいわば証明したからである)。

<講義> この事例は、かのピカルディー語の *rescapé* が、フランス共通語のなかに入り、それ以後 *réchappé* と対比されるに到った場合と、まさに比べうるものである。(p.218)

「かのピカルディー語の *rescapé* が、フランス共通語のなかに入り、それ以後 *réchappé* と対比されるに到った」という事例は辞書にも記載されている。すると、それに「まさに匹敵する (comparable)」ところの「この [*chaise* の] 事例」・すなわち「上のこと」を「私はいわば証明した」と言えよう。と

いうのは、「証明 (Beweis)」とは「一般に媒介された認識 (die vermittelte Erkenntnis)」(『大論理学』2 p.149) だが、*chaise* の事例について「私それぞれ [*chaise* が方言形であること] を知る」のも、上述のように *rescapé* の事例に媒介されてのことだからである。これが「私はそれをどのように知るか」への答えである。

[2-③④] 人はひょっとすると次のように言うかもしれない：「私はほかならぬ『(∃x).fx』を理解する。」「理解する」が何をいみするかの卓越した例。)

<講義> 相並んで *cavalier* と *chevalier*、*cavalcade* と *chevauchée* とがあるとすれば、それは *cavalier* と *cavalcade* がイタリア語から借用されたからである。これは *calidum* が、フランス語では *chaud* となり、イタリア語では *caldo* となったのと、要するに同じ事例である。どの例においても借用語である。(p.218)

フランス語には「相並んで *cavalier* と *chevalier*、*cavalcade* と *chevauchée* とがあるとすれば、それは *cavalier* と *cavalcade* がイタリア語から借用されたからである」が、「これは *calidum* が、[音韻変化を経て] フランス語では *chaud* となり、イタリア語では *caldo* となったのと、同じ事例である」。だからフランス語・イタリア語双方の知識をもつ人は、「ひょっとすると次のように言うかもしれない (Man möchte etwa sagen)」。『(∃x).fx : フランス語、fa : *cavalier*』と置いて、「私はほかならぬ (eben)『(∃x).fx』を理解する」。地方的借用語 *chaise* が「フランス文学語」を教えるのと同じように、イタリア語からの借用語 *cavalier* がフランス語を教えるからである。

そしてかかる理解こそ『「理解する」が何をいみするかの卓越した例』である。というのは、ラテン語からのロマン諸語の帰結は言語進化の「卓越した例 (ein herrliches Beispiel)」だからである。『講義』に曰く

(参考) ロマン語学者はインドヨーロッパ語学者の知らない特恵的条件下 (dans des conditions privilégiées) にあった：すなわちロマン語の原

型であるラテン語を知っていたのだ；また、記録の豊富なことも、特有語の進化をくわしく跡づけることを可能にした。(p.14)

「特有語の進化をくわしく跡づけることができる」ロマン語学者は「ほかならぬロマン諸語を理解する」。PG が言及する「人」はこうした人々である。

(3)

[3] しかし私は、同じく「(∃x).fx が fa から帰結することをどのように知るか」と問い、そして次のようにも答えることができたろう：「私は『(∃x).fx』を理解するから」。だがそれが帰結することを、私は実際にはどのように知るか。 — 私がそのように見積もるからだ。

<講義> それならば、ラテン語の代名詞 *mē* がフランス語では *me* と *moi* の二つの形態となって現われているのはどうなのだ(参照、「il me voit」と「c'est moi qu'il voit」) というならば、こう答えよう：*me* となったのはラテン語の無揚音の *mē* であり、アクセントのある *mē* は *moi* を生じた；(p.219)

PG である。同じ問い「(∃x).fx が fa から帰結することをどのように知るか」の答えが、前の事例の「私はほかならぬ『(∃x).fx』を理解する」に対して、ここでは「私は『(∃x).fx』を理解する」である。『講義』に即して言えば、借用語を離れ、フランス語がその原型 (prototype) であるラテン語との関係で考察される。いわば通常の言語進化が採り上げられ、だから「fa: *mē*」である⁽⁷⁾。

はじめに PG・『講義』両テキストの対応関係である。

- ・「(∃x).fx が fa から帰結する」：「*me* となったのはラテン語の無揚音の *mē* であり、アクセントのある *mē* は *moi* を生じた」
- ・「私は『(∃x).fx』を理解する」：「[私は] "il *me* voit" と "c'est *moi* qu'il voit" [を理解する]」

- ・「それが帰結すること」：「ラテン語の代名詞 *mē* がフランス語では *me* と *moi* の二つの形態となって現われている [こと]
- ・「実際には、…そのように見積もるから」：[実際には]「ラテン語の代名詞 *mē*」[のように見積もるから]

フランス語を使うないしは使える「私」は *me* は「目的補語人称代名詞 (complément d'objet des pronoms personnels)」・ *moi* は「強勢形人称代名詞 (forme tonique des pronoms personnels)」であることを知っている。だから「*me* となったのはラテン語の無揚音の *mē* (*mē*atone) であり、アクセントのある *mē* (*mē*accentué) は *moi* を生じた、ということをごどのように知るのか」と問われれば、「私は"il *me* voit"と"*c'est moi* qu'il voit"を理解する」と答えて不足はなからう。ここまではよい、問題は次である。では、「ラテン語の代名詞 *mē* がフランス語では *me* と *moi* の二つの形態となって現われている」、そのことを「私は実際には (wirklich) どのように知るのか」と問われ、答えは「[*mē*] そのように [つまり「ラテン語の代名詞 *mē*」のよう]に見積もるから」である。この問答は何を言っているのか。

『講義』の次の叙述を参考にしよう。

(参考) 言語はやはりわずかなりと変容するものであるから、一つの言語状態を研究するということは、つまるところ、実践上では軽微な変化を無視することに帰する、それは数学者がある種の運算、例えば対数の計算などにおいて、微小数を切り捨てるのに似ている。(p.144)

まず使用語での対応を指摘しておこう。『講義』に「対数の計算 (calcul)」とあり、PG では「見積もる (kalkulieren)」と言う。また「opérer (> opération: 運算)」と「wirken (> wirklich)」とは類語。

さて「対数の計算」とは次である。任意の正の数 X に対して $X=10^a$ により定められる実数 a を、10 を底とする X の常用対数と言ひ、記号 $\log_{10} X$ で表わす。 X を $X=a \times 10^s$ ($1 \leq a < 10$, s は整数) の形で表わせば、 $\log_{10} X = s + \log_{10} a$ より X が 1 以上 10 未満のときの値から常用対数 a を計算して出すことができる。「微小数を切り捨てる」ことでその産出を簡便化したのが常用対数表で

あり、そこでは例えば $\log_{10}200 \doteq 2.3010$ が容易に得られる。

そして数学者が「微小数を切り捨てる (négligent les quantités infinitésimales)」のに似て、言語学者は「一つの言語状態 (un état de langue)」（共時態）の研究において「軽微な変化を無視する (négligent les changements peu importants)」。マグニチュードの測定といった実用に対数計算が使われるのと同じく、ここでも研究は「実践的 (pratiquement)」であり — ‘pratiquement (独語‘praktisch’) は‘wirklich’の類語 — 、ラテン語研究では揚音 $m\acute{e}$ と無揚音 $m\bar{e}$ の別を超えて「ラテン語の代名詞 $m\bar{e}$ 」と把握されるのである。

‘la quantité infinitésimale’の‘infinitésimal’は「無限小の」の謂である。そこで「微小数の切り捨て」や「軽微な変化の無視」を、『大論理学』の次の一文の具体例と見ることができる。

＜大＞ 有限な諸物の規定は、その終りということ以外ではない。Die Bestimmung der endlichen Dinge ist nicht eine weitere als ihr *Ende*. (WdL I S.140)

いま「有限な物」は例えば「2.3010」である。概数なる「規定」（計算されたもの）は $\log_{10}200$ の「終り」（非存在）でしかない。同じくラテン語という「一つの言語状態」の研究において、その「規定」（見積もられたもの・推定されたもの）の「終り」（非存在）であるのが「ラテン語の代名詞 $m\bar{e}$ (le pronom latin $m\bar{e}$)」である。存在するのは「揚音のラテン語代名詞 $m\acute{e}$ 」と「無揚音のラテン語代名詞 $m\bar{e}$ 」とだからである。

(4)

[4] 私は $(\exists x).fx$ が fa から帰結することをどのように知るのか。私は、いわば記号「 $(\exists x).fx$ 」の背後を知り、 $(\exists x).fx$ の背後に存する意義とそれが fa から帰結することを知るのか、それが理解する運動か。

<講義> ところでアクセントの現前または不在は、*mē* を *me* や *moi* に移らしめた音韻法則に依存するものではなくて、文中におけるこの語の役割に依存するものである；すなわち文法的二面性である。(p.219)

PG「私は(∃x).fx が fa から帰結することをどのように知るのか」は前文冒頭の「(∃x).fx が fa から帰結することをどのように知るのか」と同じだが、ただしここではすでに「実践的研究」に関する考察を経ての問いである。

『講義』の「この語 (ce mot)」はフランス語の「人称代名詞」を指す。一方の *me* すなわち「目的補語人称代名詞」は「動詞または助動詞の前に置かれ、原則としてアクセントを受けない」が、他方の *moi* すなわち「強勢形人称代名詞」は「動詞から独立して使われる」。だから「アクセントの [*moi* での] 現前または [*me* での] 不在 (la présence ou l'absence de l'accent) が、文中におけるこの語の役割に依存する」ことを、フランス語話者はもちろん知っている。

それにもかかわらず、『講義』は「*mē* を *me* や *moi* に移らしめた音韻法則に依存するものではない」と駄目を押し、PG は「私は(∃x).fx が fa から帰結することをどのように知るのか」と繰り返す。これは「一つの言語状態の研究」が「実践的」である、そのことの何であるかを見極める姿勢である。『大論理学』の次の叙述が参照されよう。

<大> 悟性は非存在を物の規定とすると同時に、それを不滅かつ絶対的とすることで、有限性の悲哀のなかにとどまり続ける。Der Verstand verharret in dieser Trauer der Endlichkeit, indem er das Nichtsein zur Bestimmung der Dinge, es zugleich *unvergänglich* und *absolut* macht. (WdL I S.140)

「一つの言語状態 [ラテン語] の研究」において、「物 [*mē*] の規定」すなわち「ラテン語の代名詞 *mē*」という規定は「その物の終り [非存在]」であった。そして「それを不滅かつ絶対的とする」ことで、ラテン語の研究は「有限性の悲哀のなかにとどまり続ける」。「有限性の悲哀」とは「有限な物」

の「誕生の時はその死の時である」(ibid.)、そのことである。そうであれば、死にゆく「ラテン語の代名詞 *mē*」は *me*・*moi*に移行せざるをえない。ここに「*mē*を *me*や *moi*に移らしめた音韻法則」という把握がなされ、「アクセントの現前または不在はこの音韻法則に依存する」、悟性的な研究はこのように理解するのである⁽⁸⁾。

さて「*mē*を *me*や *moi*に移らしめた音韻法則」は通時論的であり、当の移行は現代フランス語に先行する。だから“il *me* voit”・“c'est *moi* qu'il voit”を理解するフランス語話者にとって、それはいわば「記号『(ɔx).fx』の背後(hinter)」なるものである — 「記号『(ɔx).fx』: *me*・*moi*」 — 。すると「アクセントの現前または不在は、*mē*を *me*や *moi*に移らしめた音韻法則に依存する」という理解においては、フランス語話者は「いわば記号『(ɔx).fx』の背後を知り、(ɔx).fxの背後に存する意義とそれが *fa* から帰結することを知る」ということになる — 「(ɔx).fxの背後に存する意義: アクセントの現前または不在⁽⁹⁾」、*fa*: *mē*」 — 。

けれどもこれは『講義』によって斥けられ — 「音韻法則に依存するものではない」 — 、PGも懐疑的である — 「それが理解する運動か」 — 。実際、「話手にとっては、時間における言語事象の継起は存在しない: 眼の前にあるのは状態である」(p.115)のだから、フランス語話者が「記号「(ɔx).fx」の背後を知る」ことはない。

(5)

[5] そうではない、先の等式は理解する運動の一部分を表現している(それはそのように拡張されて私の前にある)。

<講義> 同じく、ドイツ語で、**ur-*はアクセントのもとではそのまま *ur-*であり、前揚音的の場合は *er-*となった(参照、*úrlaub*: *erláuben*); (p.219)

『講義』が「同じく」と言うのは、前文での「アクセントの現前または不

在」を承け、「[アクセントの現前または不在については] 同じく、ドイツ語で」と例を与える。なお中高ドイツ語にさかのぼれば、「*úrlaub (Urlaub) > ur-loup*」・「*erlaúben > ur-louben*」であることを補足しておこう。

PG「先の等式」は「(∃x).fx.fa.=.fa」である。それは例に即して、「アクセントの現前または不在は、*mē*を*me*や*moi*に移らしめた音韻法則に依存する」という理解であった。そしてかかる「理解する運動」は「有限性の悲哀のなかに」あった。

これに対してドイツ語の場合、「**ur-*はアクセントのもとではそのまま (*resté*) *ur-*であり、前揚音的の場合は *er-*となった」。すると「アクセントの現前または不在が文中におけるこの語 [前接辞] の役割に依存する」こと・すなわち「文法的二面性」が、中高ドイツ語の「*ur-loup : ur-louben*」にも現代ドイツ語の「*Ur-laub : er-lauben*」にも認められている——「役割」は後述する「合成法」における役割——。だから「理解する運動」は「有限性の悲哀のなかにある」ことを免れている。つまり『大論理学』の次の叙述である。

<大> 有限性のはかなさはその他者・肯定的なものにおいてのみ消滅しうるのであろう *Ihre Vergänglichkeit könnte nur in ihrem Anderen, dem Affirmativen, vergehen ; (WdL I S.140)*

非存在が不滅かつ絶対的であるという「有限性のはかなさ」はここにはない。なるほど「**ur*→*ur*・*er-*」の音韻変化は存するが、その音韻変化の前と後に「文法的二面性」が認められ、だからそれは「自分との同一性」(op.cit. S.148)として「肯定的なもの」である。そして、「*ur-loup : ur-louben*」の文法的二面性がひとたびは音韻変化で引き離され——「*ur-* : *ur-*」対「*ur-* : *er-*」——、しかし「*Ur-laub : er-lauben*」においてふたたび復活する、このように理解されることで、「自分との同一性」は「否定の否定」である (ibid.)。そこでPGは「先の等式は理解する運動の一部分 (ein Teil) を表現している」と言う。(∃x).fx.fa.=.faを「否定の否定」(理解する運動)に対する「第一の否定」と見るからである。あるいはこれを、「[第一の否定たる] 等式は [第

二の否定にまで] 拡張されて (*ausgebreitet*) 私の前にある」と言ってもよい。

(6)

[6] 根源的に一撃で襲う運動がいまそのように拡張されうる、そうした理解する運動の解釈を比較せよ。

<講義> しかしこのアクセントの営みそのものは、*ur-*の入っていた合成法の型にかかわり、したがって文法的・共時論的条件にかかわる。(p.219)

PG は前文「等式(∃x).fx.fa.=fa はそのように拡張されて私の前にある」を承けて、「根源的に一撃で襲う運動がいまそのように拡張されうる」と言う。つまり(∃x).fx.fa.=fa が「根源的に一撃で襲う運動 (*das ursprünglich ein Erfassen mit einem Schlag*)」と把握されている。

「根源的」の使用例はすでに『講義』に見られた。§3 の冒頭文である。再掲しよう。

(参考) 第1節「文法的連結の中断」および第2節「語の合成の抹殺」で考察した二つの場合では、進化が、元來文法的につながれた二つの辞項を徹底的に[根源的に]引き離している (*sépare radicalement deux termes unis grammaticalement à l'origine*)。

そしてこの「根源的な引き離し」に関連するのが、音韻変化を類推と対比する『講義』の叙述である。

(参考) 音韻変化が、先立つものを斥けずには新しいものを何一つ引き入れないのにたいし (*honōrem* は *honōsem* に取ってかわる)、類推形は必ずしもそれと重なったものの消滅を巻き添えにはしない。*honor* と *honōs* とはしばらくのあいだ共存し、いずれを用いても差し支えなかった。

(p.228)

名格では類推形 *honor* と伝承形 *honōs* との共存が見られるのに対して、対格においては「*honōrem* が *honōsem* に取ってかわる (remplace)」。この音韻変化・すなわち「*s* の *r* 音化 (la rotacisation de l'*s*)」(p.225) は「*honōs* : *honōsem*」を「*honōs* : *honōrem*」に変えるのだから、「元来文法的につながれた二つの辞項を根源的に引き離す」ところの「根源的に一撃で襲う運動」である。ただし「*honōs* : *honōrem*」も「*honōs* : *honōsem*」と同じ「名格：対格」であるから、先の「*ur-loup* : *ur-louben*→*Ur-laub* : *er-lauben*」同様「根源的に一撃で襲う運動はいま拡張されうる」。

そして PG は、「そうした理解する運動の解釈 (die Auffassung des Verstehens) を比較せよ」と説く。ここでも『講義』第 3 節冒頭文が念頭に置かれている。

「*honōs* : *honōsem*→*honōs* : *honōrem*」は「文法的連結の中断」の例である。「*honōs* : *honōsem*」に比べて、「*honōs* : *honōrem*」では「対格はもはや名格からの派生語とは感じられなくなる」(p.215) からである。他方、『講義』が言及するように、「*ur-loup* : *ur-louben*→*Ur-laub* : *er-lauben*」は「語の合成の抹殺」の例である。「アクセントの営みそのものは、合成法の型にかかわり、したがって文法的・共時論的条件にかかわる」ことが、対立「*Ur-laub* : *er-lauben*」に比べ「*ur-loup* : *ur-louben*」においてより明確に把握されるからである——「文法的・共時論的条件」とは、*ur* が「アクセントのもとでは (sous l'accent)」実体詞・形容詞に前接し、それ以外の前接では「前揚音的 (en protonique)」である、ということ——。音韻変化を経た「*Ur-laub* : *er-lauben*」では、「語の価値を定めるのに役立っていたその明かな (distinct) 諸部分が、分析可能であることをやめてしまっている」(p.216) ののである。

さてここに説かれた「引き離し (séparation)」——「文法的連結の中断」と「語の合成の抹殺」——と関連するのが、『大論理学』の叙述

<大> そこでそれらの有限性が物から分離されるであろう so trennte sich ihre Endlichkeit von ihnen ab ; (WdL I S.140)

の「分離」である。例えば「*honōs: honōsem*→*honōs: honōrem*」において、「対格」——それは「名格」との関係において対格である——は *honōsem* にも *honōrem* にも認められ、そのものとして「物から分離されている」。*honōs* の価値が「*honōs: honōsem*」と「*honōs: honōrem*」とでは異なると考えれば、「名格」もまた「物から分離されている」。また「*ur-loup: ur-louben*→*Ur-laub: er-lauben*」の場合、「分析可能」の「分明・不分明」の程度は相対的であり、つまり「文法的・共時論的条件」が「物から分離されている」⁽¹⁰⁾。

(7)

[7]「(∃x).fx が帰結することを私は知っている、なぜなら私はそれを理解するからだ」と私が言うとき、それは次のいみであろう、すなわち、それを理解しながら、与えられた記号とは別の或るもの、いわば帰結する運動がそれから生ずる記号の定義を私は見ている。

<講義> 最後に、当初の例に戻るならば、*bārō: barōnem* の対が示す語形とアクセントの差異は、音韻変化に先立つことは明白である。(p.219)

『講義』に謂う「当初の例」とは、本稿 [1] に説かれた「後期ラテン語の *barō: barōnem* の相対的同一と、古代フランス語 *ber: baron* の不同」である。「音韻変化」は「元来文法的につながれた二つの辞項を徹底的に引き離す」のだった。そして「*ur-loup: ur-louben*→*Ur-laub: er-lauben*」の各対立にそれぞれ「相対的同一」と「不同」が認められると同じく、「*bārō: barōnem*→*ber: baron*」においても、前の対立での「文法的につながれた二つの辞項」すなわち「同一語の屈折形」が後の対立で引き離されている。そうであれば「*bārō: barōnem* の対が示す語形とアクセントの差異が、[引き離しをもたらす] 音韻変化に先立つことは明白である」。

PG である。「(∃x).fx が帰結することを私は知っている、なぜなら私はそれを理解するからだ」ということは、[3] でも説かれた。そこでは「実践的に、見積もる」ことが考察され、しかしそれは「理解する運動」でないこと

が [4] で明かされた。これに対して、ここでの「私は理解する」は、 $(\exists x).fx.f.a.=fa$ が拡張されていることを理解する。そしてその「いみする (heißt)」ところが続いて説かれる。

まず「 $(\exists x).fx$ が帰結する」、その $(\exists x).fx$ は『講義』に即して「*ber: baron*」であり、これが「与えられた記号」である。そしてその「帰結する運動がそれから生ずる記号」とは「*bárō: barónem*」である。だからその「記号の定義」とは、「この対は同一語の二つの屈折形である」、これである。したがって $(\exists x).fx$ すなわち「*ber: baron*」を理解しながら私が見ている「与えられた記号とは別の或るもの」とは、「音韻変化に先立つ語形とアクセントの差異」である。

(8)

[8] 依存はむしろ等式によって樹立・確定されないのか。というのは、隠れた依存はといえば、そんなものはないのだから。

<講義> 実のところ、音韻的双生語なるものはどこにも見当たらない。
(p.219)

「*ber: baron*」を理解する人は、そこに「音韻変化に先立つ語形とアクセントの差異」を見ている。その「差異」は「*bárō: barónem*」のそれであった。するとここでは、「*bárō: barónem*」・「*ber: baron*」という二つの対立が、一方の「相対的同一」・他方の「不同」を超えて「語形とアクセントの差異」において等しいとされている。そして「語形とアクセントの差異」は「文法的・共時論的条件にかかわる [依存する] (*est lié*)」のであった。そうであれば、前者が等しいとされるのは、後者すなわち「依存が等式によって樹立・確定されるからではないのか」。PG 前半はこのように問う。

さて、「*ber: baron*」は共時態である。そして

(参考) 共時言語学は、共存し・かつ体系を形づくる諸辞項をむすぶところの論理的および心理的關係を、同一の集団意識によって知覚されるままに取り扱うであろう。(p.219)

と説かれるように、「文法的・共時論的条件」は「知覚される (aperçu)」。そして知覚されるものは隠れていない。つまり PG の言う「隠れた依存 (eine verborgene Abhängigkeit)」とは音韻変化への依存のことであり、「そんなものはない (es gibt eben nicht)」。換言して、「音韻的[・]双生語なるものはどこにも見当たらない (on ne constate nulle part de doublets phonétiques)」 — 別訳：「音韻的[・]双生語はといえば、そんなものはかけらも見つからない」 — 。するとやはり「文法的・共時論的条件への依存は等式によって樹立・確定される (hergestellt und festgesetzt) のではないか」。

そこでまず [表 2] が掲げられる。

(∃x).fx	fa
真	真
真	偽
——偽——	——真——
偽	偽

一・二行目は、(∃x).fx の存立が fa の真偽に無関係であり、「音韻的[・]双生語なるものはどこにも見当たらない」。四行目は、帰結する(∃x).fx が偽 (非存立) だというのだから、いま問題外である。

したがって先の問い「文法的・共時論的条件への依存は等式によって樹立・確定されるのではないか」の解明は三行目にかかっている。はじめに関連する『講義』を参照する。

(参考) 初頭的でない開音節におけるラテン語の短音 a は、i に変じた : *faciō* とならんで *conficiō* がある、というふうに。人はしばしばこの法

則をつぎのようにも言い表わす：*faciō*の*a*は*conficiō*では*i*となる、なぜならそれはもう第一音節にないからである、と。これは精密でない：いまだかつて*faciō*の*a*が*conficiō*において*i*と「なった」ためしはない。真理を建てなおすには、二つの時代と四つの辞項を識別せねばならない：人は最初*faciō*：*confaciō*と言った；次いで*confaciō*が*conficiō*と変容し、*faciō*の方は変化をうけず存続したので、*faciō*：*conficiō*と言ったのだ。(p.135)

対立「*faciō*：*conficiō*」も「*honōs*：*honōrem*」と同じである。*honōrem*の形成は*r*音化によるのであって、「*honōs*の*s*が*honōrem*では*r*となる」のではない。それと同じく「*faciō*の*a*が*conficiō*において*i*と『なった』(devenu)ためしはない」。つまりここでも根源的に一撃で襲う運動(*confaciō*→*conficiō*)が拡張されての「理解する運動」である——「*faciō*：*confaciō*」と「*faciō*：*conficiō*」とで文法的二面性が等しいと見る——。

ただし「*faciō*：*conficiō*」については「*honōs*：*honōrem*」と異なる点も指摘されている。引き続き『講義』が説く。

(参考) 人はややもすれば、それ [*faciō*：*conficiō*] は事実ではなくて結果であるという。しかしながらそれはけっこうその秩序における事実であって、およそ共時的現象はすべてこの性質のものである。対立 *faciō*：*conficiō* の真の価値を認めることを妨げるものは、それがたいして意義をもたないことである。(p.135)

「*honōs*：*honōrem*」での格の対立に比べ、「*faciō*：*conficiō*」では何が対立するのか。「それはたいして意義をもたない」ので、そのことが「真の価値を認めることを妨げる (empêche de reconnaître la véritable valeur)」。これを「価値の非存立」とみなして、三行目「(∃x).fx：偽、fa：真」である。けれども価値を認めることの障害 (empêchement) は価値の非存立ではない。そこで三行目が消される。

(9)

[9] しかし — 私が私念するに — それゆえこの表が可能であるためには、 $(\exists x).fx$ は fa の真理関数であってはならないのか。この依存が可能であるためには。

<講義> 音の進化は、それ以前からある差異を強調するだけのことである。(p.219)

[表 2] で三行目が消されるのだから、「 $(\exists x).fx$ は fa の真理関数ではない」。それにもかかわらず、PG はなお「 $(\exists x).fx$ は fa の真理関数である」ことに固執する — 「私は私念する (*ich meine*)」 — 。しかも「この表が可能である」・「この依存が可能である」ことは譲らない。「この表」は三行目が消された [表 2] である。つまり例に即して、たいした意義をもたない「*faciō: conficiō*」ではあるが、やはりそこで「根源的に一撃で襲う運動」(*confaciō→ conficiō*) が「拡張されている」。「この表が可能である」とはこのことを言う。あるいは別言して、三行目が消されるのは「*faciō: confaciō*」・「*faciō: conficiō*」の等しい価値（文法的二面性）を認めるからであり、その限りで「この [文法的・共時論的条件への] 依存が可能である」。その価値が格や語構成といった「たいした意義 (*très significatif*)」ではないにせよ。

『講義』が「音の進化は、それ以前からある差異を強調する」と説く、その典型は次の第四節の主題「交替」である。例えば *Gast: Gäste* や *Hand: Hände* では実体詞の複数がウムラウトによって印象づけられるが、そうした単複の差異そのものは「音の進化以前からある差異」(*gast: gasti* や *hant: hanti*) と変わらない — 「音の進化」は「*gasti→geste (Gäste)*」・「*hanti→hente (Hände)*」 — 。そこで『講義』は *faciō: conficiō* に関する上の引用に続けて次を説く。

(参考) 対立 *faciō: conficiō* の真の価値を認めることを妨げるものは、それがたいして意義をもたないことである。しかし対 *Gast: Gäste* を一考に及ぶならば、この対立もまた、音韻進化の偶生的結果でありながら、し

かも共時論的秩序において本質的な文法現象を組みたてずにはおかないことが、わかるであろう。(p.135)

なるほど「音の進化は強調する (accentuer) だけ」である。けれどもその「音の進化」の「偶生的結果 (le résultat fortuit)」が、まさに「共時論的秩序において本質的な文法現象を組みたてる (constituent des phénomènes grammaticaux essentiels)」——‘constituer’ (独語‘bilden’) は‘herstellen’・‘festsetzen’の類語——。そうであれば「 $(\exists x).fx$ は fa の真理関数であってはならないのか (muß also nicht sein)」の問いには、「真理関数であるはずだ (muß)」と答えたくなる。

(10)

[10] それなら、 $(\exists x).fx \vee fa = (\exists x).fx$ はまさに、 fa がすでに $(\exists x).fx$ に含まれていることを語らないか。それは $(\exists x).fx$ への fa の依存を示さないか。否、 $(\exists x).fx$ が、(和の項 fa を含む) 論理和として定義されるなら別だが。—— その場合には、 $(\exists x).fx$ は一つの省略にすぎない。

<講義> こうした差異が、借用語の場合のように、外部的原因によらないときは、それらは必ず音韻現象とはまったく無関係な文法的・共時論的二面性を前提するのである。(p.219)

PG・『講義』の両テキストに次の対応が見られる。

(i) A が B に「すでに含まれている (schon enthalten)」ならそれは B への A の「依存 (Abhängigkeit)」だが、そのことの「否」において B は A と「まったく無関係 (absolument étranger)」にある——‘enthalten’は‘innewohnen’ (内在する) の類語。一方の‘étranger’は「無関係な・外在的な」——。

(ii) 「定義の内容がそれ自体で自立的に (an und für sich) 真理態であるかそれとも偶然性であるかということは、定義の領域の外に属する (dies liegt außer ihrer Sphäre)」(『大論理学』3 p.320)。そこで「C が D として

定義される」を、「Cは外部的原因によって (dû à des causes extérieures) Dである」と言い換えることができる。

(iii) 共通の構文: 「Eでないなら、Fである」。PGは「[F̄であるか、否] Fである、Eであるなら別だが (außer, wenn ~)」。これは「Eによらないときは必ず (partout où ~ ne sont pas dues à ~)、Fである」と書き換えられ、『講義』である。

以上を踏まえ読解する。PG「それなら」は、『講義』に即して「音の進化は、それ以前からある差異を強調するだけである、それなら」である。交替「*Gast: Gäste*」はその例であったが、関連して『講義』の次の叙述を再掲する。

(参考) 初頭的でない開音節におけるラテン語の短音 *a* は、*i* に変じた: *faciō* とならんで *conficiō* がある、というふうには。人はしばしばこの法則をつぎのようにも言い表わす: *faciō* の *a* は *conficiō* では *i* となる、なぜならそれはもう第一音節にないからである、と。これは精密でない。

そこで同じように「*Gast* の *a* は *Gäste* では *ä* になる」と言い表わせれば、*Gast* はすでに *Gäste* に含まれている。あくまで「*Gast* の *a* が *ä* になる (devient)」のであり、存在しない *a*・含まれていない *a* は *ä* になりようがないからである。PG 前半はこのことを説く。

けれどもこれをソシュールは「精密でない」と斥け、PG も「否」と断ずる。真相はどうか。そこで $(\exists x).fx \vee fa = (\exists x).fx$ だが、上記 (iii) のように、これは二通りに考えられる — 「Eでない (なら、Fである)」場合と「Eである (なら、Fでない)」場合 —。

後者「Eである」場合はすでに [2] で採り上げており、『講義』は「借用語」を検討した。ここでも同じく「fa: 借用語」である。それに呼応して PG は「 $(\exists x).fx$ が、(和の項 fa を含む) 論理和として定義されるなら」と言う。「論理和 (logische Summe)」は可能的属性を $P_1P_2P_3\cdots$ としたときの $P_1(x) \vee P_2(x) \vee P_3(x) \vee \cdots \vee P_n(x)$ だからである⁽¹¹⁾。そこでいま「学者的借用語」を例に採れば、「*collocāre* が生じたフランス語は *coucher* または *colloquer* である」

が当の定義である。けれども上に見たように、「定義の内容は定義の領域の外に属する」。換言して、「*coucher* または *colloquer*」すなわち「*coucher* と *colloquer* の差異」は「外部的原因によっている」。だからそれは偶然的・可能的⁽¹²⁾ であって、例えばギリシャ語からの借用もありうる。つまり完全に枚挙されることはなく、「 $(\exists x).fx$ は一つの省略にすぎない」。

「E でない」場合については、『講義』をさらに参照する（一部再掲）。

（参考） これは精密でない：いまだかつて *faciō* の *a* が *conficiō* において *i* と「なった」ためしはない。真理を建てなおすには、二つの時代と四つの辞項を識別せねばならない：人は最初 *faciō*: *confaciō* といった；次いで *confaciō* が *conficiō* と変容し、*faciō* の方は変化をうけず継続したので、*faciō*: *conficiō* といったのだ。つまり

faciō ←→ *confaciō* A 時代

↓ ↓

faciō ←→ *conficiō* B 時代

もし「変化」が生じたとすれば、それは *confaciō* と *conficiō* とのあいだである；ところが規則のたてかたがまずいので、この第一の事実さえもあげていない！ 次に、この・当然通時論的である変化とならんで、第二の事実がある、これは第一のものとはまったく別物であって、*faciō* と *conficiō* とのあいだの純然たる共時論的対立にかかわる。（p.135）

これは [5] に説かれた **ur* の場合と変わらない — 「*a* は *faciō* のもとではそのまま *faciō* であり、*confaciō* の場合は *conficiō* となった」 — 。なるほど「*faciō*: *conficiō*」の「純然たる (purement) 共時論的対立」は「たいした意義をもたない」 — ‘*pur*’は‘*Qui est seulement, complètement tel et rien d'autre.*」すなわち「それ以外に何も無い」の謂 — 。けれどもまさにその点において、それは「音韻現象とはまったく無関係な文法的・共時論的二面性を前提している (supposent)」のである⁽¹³⁾ — ‘*supposer*’は「(当然のこととして事柄を) 前提とする」 — 。以上がことの真相である。

1 節の「内容」は、「p が q から帰結することをわれわれが知るの、それらの命題を理解するからなのか」と問うた。『講義』第 3 節に即した読解は、しかしこれに対して肯定的な答えを与えることはできなかった。人は「通時論的事実」と「共時論的事実」を正確に理解しておらず、言語事実はその「解釈上重大な誤り」に陥っているのである。その正す方向を改めて『講義』に求めれば次であろう（引例は変えてある）。

（参考） 言語というものは、われわれがややもすれば抱きたがる謬想とはうらはらに、表現すべき概念を顧慮して創造され・配備された機構ではない。われわれはかえって、変化から生じた状態は、それが新たに作り込んだ意義をしるすべく運命づけられたものではない、と見るのである。ある偶生的状態が与えられた：*gast: geste* が、すると人はこれを、単数・複数の別を立てるために流用するのである；*gast: geste* は *gast: gasti* に比べて別に出色のものとも思えない。おのおのの状態において、与えられた資料に魂が吹きこまれ、活が入れられるのだ。（p.120）

「変化 [*gasti*→*geste*] から生じた状態 [*gast: geste*] は、それが新たに作り込んだ意義をしるすべく運命づけられたものではない」にもかかわらず、人は「それを単数・複数の別を立てるために流用する」。かくして「変化から生じた状態」が「新たな意義を取り込む」のだが、すると「変化から生じた状態」は「拡張されて私の前にある」。そのとき「*gast: geste* [*Gast: Gäste*] は *gast: gasti* に比べて別に出色のもの」でなく、ただ「それ以前からある差異を強調するだけのことである」。

同じように、1 節「内容」の二番目の問い「帰結する運動は意義から出てくるのか」についても、『講義』第 4 節の挙げる言語事実が読解の助けとなるだろう。

「ウィトゲンシュタインはよく分からない」と言うなら、それは偏に読手の側の責任である。事実本稿は、著者の思考過程を忠実に再現しえた、私はこう自負している。思考過程すなわち「論理」であるから、本稿において「論

理的なもの」が把握されたのである。ソシュール『講義』に叙される言語事実の参照が、その把握に有益であることは繰り返すまでもない。

もっともウィトゲンシュタインをソシュールに即して読み解くと言えば、「両者の対応は偶然的にすぎない」といった論難が予想される。しかし私に言わせれば、論者たちは学——ここに謂う「学」は無論「批判哲学が形而上学を論理学にした」後の時代における学である——における「偶然性」に理解が及んでいない。学ばれるべきはヘーゲルの説く次である。

必然性は自己を偶然性として規定するその当のものである。(『大論理学』
2 p.250)

そしてより深刻であるのは、論者たちが視野狭窄に陥っていることである。これまでの研究動向の枠に閉じこもり、わずか一歩もそこから出ようとしなない。しかし『講義』の刊行は1916年、すでに研究生生活を始めているウィトゲンシュタインがこれを読んでいないとなぜ言えるのか。しかも彼はフランス語に堪能であったのだ。ウィトゲンシュタイン研究者のほとんどは『講義』を読んだことすらあるまい。その論者がソシュールはウィトゲンシュタインと無関係と断ずるなら傲慢でしかない。

別の例も挙げておこう。『確実性について』の一節(276節)。

<確実性> いわばわれわれは、この巨大な建物がそこにあることを信じ、いまや建物のこの一角を、ついであの一角を見る。Wir glauben, sozusagen, daß dieses große Gebäude da ist, und nun sehen wir einmal da ein Eckchen, einmal dort ein Eckchen.

これを読んで、ウィトゲンシュタイン研究者は何か思い付くことがあるだろうか。マルクス研究者なら当然『資本論』の冒頭文を思い出そう。

<資> 資本主義的生産様式が支配している諸社会の富は、「商品の巨大な集まり」として現われ、個々の商品はその富の要素形態として現われる。

Der Reichthum der Gesellschaften, in welchen kapitalistische Produktionsweise herrscht, erscheint als eine “ungeheure Waarensammlung”, die einzelne Waare als seine Elementarform.

「そこにあるもの [定在するもの]」はそのように外に「現われている」。また「全体は自分の存立を諸部分のもとにもっている」(『大論理学』2 p.195) のだから、あれこれの「一角」は「巨大な建物」の「境地 Element」である。両テキストの論理的な通底は紛れもない。にもかかわらず、ウィトゲンシュタイン関連の研究が『資本論』に言及することはまずない。ここでもやはり、『資本論』を読むウィトゲンシュタイン研究者の不在がその理由だろう。だが上の両文を見比べて何も感じないとすれば、それこそ奇妙なことである。守備範囲を自ら狭めて研究の深化は望めない⁽¹⁴⁾。

注：

(1) 「方法は、自己自身を知る概念、自己を絶対的なもの・[すなわち] 主観的でもあれば客観的でもあるものとして対象とする概念であり、それだから概念とその実在性との純粋な一致であり、概念そのものであるところの現実存在である。」(『大論理学』3 p.354)

(2) 例えば『大論理学』度量論は、自然科学の提供する事実を参考に理解は容易になる。以文社版1の「訳者注」はその好例である。

(3) これに関連する『講義』の挙例は次である：「原始ギリシャ語がまだその [前置詞を知らない] 状態にあった：1. *óreos bainō káta*; 属格が奪格の価値をもつので、*óreos bainō* はそれだけで「わたしは山からくる」を意味し、*káta* は「降りて」という細意を添える。他の時代になって、2. *katà óreos bainō* といった、これでは *katà* は前置詞の役をつとめている。」(p.251) 前置詞の *katà* は「(下方に向う動きの出発点を示す) ~から離れて下方へ」の謂。すると前置詞を知らない '*óreos bainō káta*' と前置詞をもつ '*katà óreos bainō*' とで、両者の「親和性はその差異性と同様、否定することができない」だろう。

(4) 前注の例で、「細意を添える (ajouter la nuance)」だけの *káta* に対し、前置詞 *katà* は他の品詞とのあいだに「はっきりした境界線 (eine scharfe Grenze)」をもっている。『講義』と『探究』の照応はより鮮明だろう。

(5) ウィトゲンシュタインは早い時期から「帰結」に関心を寄せていた。「ノルウェーで G.E. ムーアに対して口述されたノート (1914年4月)」では、「論理的命題の効用」の具体例に次が挙げられる：「同語反復が形式 $p \supset q$ のものなら、 q が p から帰結する

ことが分かる」。一般には、「 $p \supset q$ 」の真偽は「 p ：真、 q ：偽」の場合に偽、それ以外の場合は真と説かれ、つまりウィトゲンシュタインは前件と後件を逆さまにする。詳細は別稿を期すが、ここに帰結関係に対するウィトゲンシュタインのこだわりが現われていよう。

(6) 『文学語』(langue littéraire) というのは、ただに文学上の言語のみならず、なおいっそう広い意味において、公用語であれなけれ、当の社会全体の用に供せられる・あらゆる種類の開化語を意味する。』(『講義』 p.275)

(7) 正確には語「 $m\bar{e}$ 」でなく「音韻変化の起点 (le point de départ) になる音」である。「音韻変化がおそうのは、語ではなく、音である」(p.131) からである。

(8) ソシュール自身は「音韻法則」なる把握に批判的である (p.131)。

(9) 正確には、「アクセントの現前または不在」によって表わされる意義、である。後述する「*Gast: Gäste*」ではウムラウトの現前または不在によって実体詞の単数・複数が表わされるが、同じことである。

(10) [3] 以降ここまで引用した『大論理学』の叙述は、存在論定在章の「B 有限性 (c) 有限性 (α) 有限性の直接性 1 パラグラフ」で連続する文 (第 9 文～第 12 文) である。つまり PG および『講義』の叙述を、『大論理学』の論理展開との一対一対応において読むことができる。

(11) 松本正夫『「存在の論理学」研究』 p.247 以下。なお $P_1(x) \vee P_2(x) \vee P_3(x) \vee \dots \vee P_n(x)$ の否定である $\overline{P_1(x)} \wedge \overline{P_2(x)} \wedge \overline{P_3(x)} \wedge \dots \wedge \overline{P_n(x)}$ において $\overline{P_1} \overline{P_2} \overline{P_3} \dots$ は必然的属性である。

(12) 「偶然的なものとは、同時にただ可能的にすぎないと規定されており・その他者ないしは反対のものがまた同じく存在するところの現実的なものである。」(『大論理学』 2 p.239)

(13) 前々注にかかわって言えば、実体詞の曲用や合成法といった「たいした意義をもたない」こと、この否定において、「*faciō: conficiō*」は必然的属性たる「文法的・共時論的二面性 (la dualité grammaticale et synchronique)」である。

(14) 同じことはソシュール研究者・マルクス研究者についても言える。ウィトゲンシュタインを『講義』や『資本論』の優れた読手と位置付けるならば、これまでのソシュール・マルクス研究とは異なる側面が披かれると思う。ウィトゲンシュタインは実に卓越した論理的読解を遺しているからである。なお『講義』成立過程の詮索とウィトゲンシュタインによる『講義』読解とが、直接の関係をもたないことは言うまでもない。

文献：

Hegel, G.W.F., *Das Sein (1812)*. Meiner. (寺沢恒信訳『大論理学』1 以文社)

Hegel, G.W.F., *Wissenschaft der Logik I*. Suhrkamp.

Hegel, G.W.F., *Wissenschaft der Logik II*. Suhrkamp. (寺沢恒信訳『大論理学』2・3 以文社)

Marx, K., *Das Kapital*. Diez. (資本論翻訳委員会訳『資本論』全 13 分冊 新日本出版社)

松本正夫『「存在の論理学」研究』 岩波書店

Saussure, F. de, *Cours de linguistique générale*. Payot. (小林英夫訳『一般言語学講義』 岩波書店)

Saussure, F. de, *Troisième cours de linguistique générale (1910-1911)*. Pergamon.

Wittgenstein, L., *Notebooks 1914-1916*. Basil Blackwell.

Wittgenstein, L., *Philosophische Grammatik*. Suhrkamp.

Wittgenstein, L., *Philosophische Untersuchungen*. Suhrkamp.

Wittgenstein, L., *Über Gewißheit*. Suhrkamp.

[各文献の引用に際し、邦訳書を併記したものはその訳文を借用したが、文字種については適宜変えてある。引用頁数も邦訳書のそれを記した。邦訳書を挙げていないテキストについては拙訳を用いた。]